
ブラックホスピタル

檀 敬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラックホスピタル

【Nコード】

N8076X

【作者名】

檀 敬

【あらすじ】

ある病院に一人の看護師がいた。この看護師を廻って様々なことが起きる。そしてこの看護師の行く末は？ キーワードは「やさぐれ看護師」と「歩き方が間違っていた」である。どうぞ、お楽しみくださいませ。

(前書き)

沢木香穂里さんのお題である「やさぐれ看護師」と「歩き方が間違っていた」を使わせていただいて小説を書いてみました。しかし、これってどういうジャンルになるんですかねえ？ 今のところは「コメディ」ってことでよろしくです。

「うーん、どうも上手くいかないわねー」

そう言って、あたしは採血するための注射針を何度も、患者の腕に注射し直していた。既に患者はうな垂れて、痛みさえも麻痺しているかのようだった。

そう言えば、採血しますと言って現れた私を見た途端に、その患者は真つ青になって何かを諦めた表情だったことを今頃、思い出したのだった。

たまたま通り掛かったナース長があたしの採血の様子を見て、慌ててあたしから注射針を取り上げた上にあたしを押し退けた。

「申し訳ありません。あたくしが採血させていただきませす」

そう言ってその患者に平謝りしたナース長は、自分自身でその患者の採血を始めたのだった。

そんな風だから、外来の内科、整形外科、耳鼻科、眼科など、全ての診察室では、あたしを見る度にまるで汚らわしいモノを見る目付きで追い払われるのだった。

そんな訳で暇になったあたしは、入院患者が待つ各科の病棟の方へと歩みを進めた。だが、どの病棟でもナースステーションであたしを見掛けた看護師たちは、あたしを排斥するのだった。

幸いにも、整形外科のナースステーションは誰もいなかったため、そのまま病棟へと歩みを進めることが出来た。

「よう、久しぶりだな」

そう声を掛けてくれたのは、交通事故で両足大腿骨骨折で、もう六ヶ月も入院しているトラック運ちゃんの玄さんだった。

「あら、まだ入院してたの？ もうとっくに退院してるとばかり思ってたわ」

あたしがそう言うと、玄さんはバツの悪そうな顔で答えた。

「何言ってるんだい。先々月、お前さんが俺を誘惑してだな、その、なんだ、つまりだ、やつちやっただじゃないか」

玄さんにそう言われて、あたしは思い出した。

「あー、あ、そんなことがあったわねえ」

玄さんは、更に続けた。

「あの時のだな、アレが激し過ぎてだな、その、なんだ、ボルトが外れちまったんだよ」

あたしは首を傾げた。

「え？ 何のボルト？」

玄さんは咳払いをした。

「何のボルトって、足の骨を固定しているボルトだよ、ボルト！」

あたしは更に首を傾げて、玄さんに言った。

「ボルトが外れたぐらいで何なのよっ。玄さん、メチャメチャ元気で三回も逝ったじゃない」

玄さんは真っ赤な顔で脂汗を流しながら、口をパクパクとさせていた。

「それに、あの時の玄さん、あたしに言ったじゃない。『その黒のガーター、白衣から透けてるじゃねーか』って。あたしも気持ち良くてサービスしちゃったけどね」

あたしの話に、玄さんは既に赤ではなく、真っ青な顔になってうな垂れていた。

「ちよっと、アンタ！ またこんなところをうるついてっ。ダメじゃないの！」

あたしの後ろから聞こえてきたのは、鬼より怖いと噂の女事務長だった。

あたしはそつと逃げようとしていたら、女事務長があたしを怒鳴り付けたのだった。

「何処へ行くつもりなのっ！ さあ、こちらにいらっしやい！」

女事務長はそう言って、首根っこを掴んで猫を運ぶように、あた

しを事務室に連れて行った。

「どうしようもないヒトね、貴女は」

女事務長はあたしを立たせたまま、またお説教をするのかとあたしは半ばうんざりしていたが、今回はそうではないらしい。

「もう、この病院には来ないで。その代わり、私が貴女の行くべき病院を紹介してあるわ」

女事務長はそう言って、あたしにメモを渡した。

「これからはそこで働いてちょうだい。きっと貴女にピッタリだと思うわ。頑張ってね」

女事務長はあたしの背中を押して、事務室から追い出した。

あたしは、女事務長が渡してくれたメモに書かれた住所と名前を頼りにその病院を探した。

それにしても、やけにネオンがキレイに輝いている通りで、酒の匂い、ゲロの匂い、蝶ネクタイのお兄さんがサラリーマンをお店に引き入れてたり、夜なのに結構賑やかなところだった。

書かれていた住所は、その通りから細い道に入った雑居ビルの二階にあった。

「あ、ここだわ。『ブラックホスピタル』って書いてある」

あたしは、思わず口に出してしまった。

だって、嬉しかったんですもの。いかかわしいお店なんて嫌だもの。ちゃんとした『ホスピタル』っていう名前でもよかったわ。

扉を開けると、そこはピンク色の照明で薄暗かった。

「いらつしゃい。あら、この娘、ナースの格好して何よ？」

対応したその娘もナースの服を着ているのにと、あたしは変なことを言う娘だなと思った。

「ねえ、マスター！ ナース服を着た娘が来たんだけど？」

その娘が奥のほうに声を掛けると、蝶ネクタイでタキシードの男が出てきた。

「あ、聞いているよ。この娘、今日からここで働く娘だ。いろいろと

説明してやってくれ」

タキシードの男がそう言うと、ナース服の娘はあたしをフロアのソファに座らせて説明を始めた。

「いい？　ここは男性患者専門の病院なの。もしくは若い医学生やインターンもやって来るわ。そんな男の人にいろんなサービスをするの。お注射をしたりされたりはもちろん、乳癌の検診とか、痔の診察もするわよ。あなた、大丈夫かしら？」

あたしはすぐに答えた。

「だいじぶ。それ、得意分野です。任せてください！」

ナース服の娘は、あたしの様子を見て力強く答えた。

「うーん、それは頼もしいわ。じゃ、早速お願いね」

あたしは、ナース服の娘が指差した個室の診察室へと勢い良く飛び出して行った。

院長室で、鬼の女事務長は院長に報告していた。

「院長、あの淫乱ナースは、仰せの通りの方法でお払い箱に致しました」

院長は、デスクのチェアに深々と腰掛けて、女事務長の報告にうなづいていた。

「そうか、それは良かった。危うく、この病院の評価が下がるところだったからな」

安心したのか、院長は女事務長の顔を見てニヤリと笑った。

「ええ、おつしやる通りで」

女事務長もニコリと笑った。

「何処でどう、歩き方が間違っただのかなあ。看護師としての歩き方を」

溜息をつきながら、院長は香りの抜けた珈琲をすすった。

「あんな娘は、最初から『やさぐれ看護師』だったのですよ」

女事務長は吐き捨てるように言い切った。

「ま、いいじゃないか。厄介事からは開放されたんだから、ははは」

院長がそう言つと、女事務長もこう言った。

「ええ、そうですね。これで綺麗サツパリと厄介払いが出来ましたわ、ほほほ」

院長室からは男女の高笑いがいつまでも響いていた。

(後書き)

お読みいただき、ありがとうございます。

もしよろしければ、感想などを書き込んでいただけたらなら幸いです。

しかし「空想科学祭」の祭りの後の第一弾がこれとは！

ナースモノで、しかもR15で、もう一つおまけにコメディとは！
ま、お楽しみいただけたなら、それはそれで良しとするか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8076x/>

ブラックホスピタル

2011年10月22日05時40分発行